

巻頭言

国際協力と日本の力

北川 能*



人間、歳をとっても何かしら社会に貢献できる。社会にとって良いだけでなく、その方が本人にとっても心身ともに健康に生きる上で良いことと思う。かく言う私も、現在は既に年金暮らしが続いており日本国民および日本政府へ感謝するところ大である。その感謝の気持ちを表すため、オファーがあった仕事は可能な限り引き受けている。

現在、私の専門が活かせる国際協力の一つとして、東南アジア諸国の多くの島々を対象とした水力発電所の建設事業への参加がある。東南アジア諸国では現在、電力需要が急増しており発電所建設の必要性が高まっているが、資金および技術に問題がある。

多くの島々への建設であるから巨大な原子力発電所ではなく、規模としては火力発電所が適切であるが、それを維持していくには多額の燃料代が必要となる。これに対し、水力発電所は一旦建設すれば燃料代はかからずメンテナンスだけで済むため、経済的な発電所と言える。また東南アジア諸国の島々には意外と大きな川があり、雨量が多いので川の水量も多い。そのうえ全く未開発の状態にある所が多く、まさに水力発電所の建設にはうってつけである。問題は東南アジア諸国に水力発電所の建設技術がないことである。

一方の日本はどうかと言うと、水力発電所の建設技術や資金は幾らでもあるのに、肝心のそれを建設する場所がもうどこにもなく、メンテナンスだけを行っているという状態にある。そこでこの東南アジア諸国での水力発電所建設事業への日本の国際協力の出番となった。私はたまたまその設計作業の一部である急遮断時の水路系解析を行った。最初に建設する発電所は毎秒2トンの水量で発電量は8000kWであるが、近く完成のようである。

これはたまたま私が関わった一例に過ぎず、最新技術に関することでもないが、日本は今後様々なことで世界に貢献していかなければならない。

今年が明治維新から数えて150年になるという。その真ん中に第二次世界大戦があった。前半の75年間は西欧に征服されないよう死に物狂いで富国強兵に努め、いつの間にか世界有数の軍事大国になってしまった。そして結局、世界を相手に戦うことになり、敗戦。日本は負けたもののアジア諸国は西欧の植民地から次々と独立した。

一方、後半の75年間の日本は、戦前とうって変わって経済発展だけに傾注し、完全に破壊された国土から目覚ましい復興を遂げた。そして今度はいつの間にか一時はアメリカに次ぐ世界第二の経済大国になってしまった。

日本はその気になると、すぐに世界有数の国になってしまう。どうしてこのようなことが可能なのだろう。これは第一に、何にでも興味を持ち、学ぶ気持ちがあることと思う。例えば江戸時代における一般庶民の識字率は世界一だった。そして「塵劫記」という数学の本はベストセラーとなり、どの家にあつたと言われる程であるから驚く。数学の問題を解くのが一つの娯楽だったのだろう。

日本がすぐに世界有数の国になってしまう第二の理由は、技術を大切にし身体を動かすことを卑しいこととは思わないことであり、それは技術を持つ職人を大切にすることに繋がる。また自らの仕事に意味を見出し、仕事を単なる苦役ではなく自分自身を高める道と考えて打ち込み、しまいには仕事を楽しむに変えてしまう。

イラクのサマーワへの自衛隊のPKO派遣の期間も終りに近づいた頃、現地で自衛隊に対するデモがあった。デモと言っても自衛隊への感謝と滞在延長を求めるもので前代未聞である。こんなデモが起きた理由は、自衛隊がイラクの友人としてお手伝いに来たという気持ちを持っていたこと、そして何事をするにしても自衛隊の隊員が率先して現地の人たちと一緒に仕事をしたことである。他の国の部隊ではあり得ないことで、このような気持ちがある限り、日本の力は世界有数であり続けるであろう。

*所属 東京工業大学 名誉教授